

文学史叙述の途を探る：一案として、時代と言語空間を超えて伝わり親しまれている作品を翻訳・紹介し、その由来・背景を記す

——ヒンディー語地帯におけるラーマ物語りを古代、16世紀、現代にわたって垣間見る事例から——

坂田 貞二 (e-mail: hindisakata@p1.s-cat.ne.jp 注 @p1.=@ p one dot)

[0] 文学史叙述の途を探る：一案として、時代と言語空間を超えて伝わり親しまれている作品を翻訳・紹介し、その由来・背景を記す。

時代と言語空間を超えて伝わり親しまれる作品群として想起されるものに、ヒンディー文学では下記がある。

- (1) 古代から今日に継承され親しまれているラーマ物語り（この報告で詳述）。
- (2) 『バーガヴァタ・プラーナ』 ⇒16世紀のクリシュナ信仰抒情詩 ⇒クリシュナの遊戯（ゆげ）を劇化したラース・リーラー。
- (3) 南アジアの諸言語で詠われた<季節巡り>。これをみんなで展望し、翻訳をまじえて数ページで解説して一つの論文にする(坂田試行に横地優子さんからエール)。

<季節巡り>/ バーラハ・マーサーの例（『ヒンディー文学』第4号=2009年8月刊の一部）

西北インドのラージャスターンの一王国の皇太子妃であつたらしいミーラー・バーイー(1503-1573)は、われを忘れてクリシュナに祈りと讃歌を捧げ、夫の没後は夫とクリシュナを重ねて詩を詠い舞を奉納したとされる。ミーラー・バーイーは一年十二カ月をこう詠った。

愛しいお方にお願ひです、どうぞお姿をお見せください、幾度も御名を呼びました、わたしの願ひを叶えてください。

ジュート月は暑くて水が涸れ、小鳥もひどく弱ります。アーサール月の雲を見て、孔雀と郭公が踊り歌います。

サーヴァン月には雨が降り、シヴァ神と神妃の祭りティージュを祝います。バード一月には川があふれそう、独り待つ身は心細くなります。

アソージュ月を貝が待ちます、雨の甘露を喫したいと。カーティク月にラクシュミー（富の女神）を拝みます、クリシュナさまがわたしの神さま。

アガハン月は寒くなります、戻ってくださいわたしの許に。プース月には霜が降ります、わたしを援けにきてください。

マーズ月には春祭りを祝います、祭りの歌が聞こえます。ファーグン月に色水・色粉のホーリー祭、木々に若葉が茂ります。

チェート月には恋しさが募ります、どうぞお姿をお見せください。バイサーク月には郭公が歌い、木々の花が咲きそろいます。

鳥が飛びますわたしの遣い、学僧に訊ねますあなたが戻る日を、独りいる身のわたしミーラー、あなたが戻る日を待っています

[I] 本稿の目的：ラーマの物語りを例に、時代と言語空間を超えて伝わり親しまれる文学を考える。

長いあいだに多くの言葉で培われてきたインドの文学で、『ラーマヤナ』は古代から今日まで多くの人に親しまれている。

まずは、[II]で古代インドの『ラーマヤナ』の構成と粗筋を知り、ついで[III]でトゥルスィーダースによる16世紀のヒンディー語翻案『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖）』が、なに継承しどのように展開してきたかを見る。

そのために古代インドの『ラーマーヤナ』、トゥルスィーダースによる 16 世紀のヒンディー語翻案、現代に伝わる野外劇『ラーム・リーラー』から、スィター妃をラーヴァナが拉致する場面と物語りの結末の部分を試訳する。

これらの物語りのハイライトの翻訳を掲げながら、文学史を叙述できるかも知れない。

ラーマの物語りは、北インドのヒンディー語地帯において本稿で一例を示すように古代・中世・近現代と時代を超えて親しまれている。同様のことが言語横断的に見られるのではないだろうか（中世後期と現代においてベンガルやマラーター、ドラヴィダ諸圏でラーマの物語りはどのように伝えられてきたのだろうか）。

【II】古代インドの『ラーマーヤナ』（ヴァールミーキ編とされる）の構成と粗筋

第 I 卷 幼年の巻＝アヨーディヤーに都するダシャラタ王の三人の妃にラーマ、バラタ、ラクシュマナ、シャトゥルグナの四王子が授かる。ヴィデーハ国の婿選びの儀式で豪力をみせたラーマはスィター妃と結婚する。

第 II 卷 都アヨーディヤーの巻＝王家の内紛から、第 1 王子ラーマが森に追放されることになり、弟のラクシュマナと妻のスィターがラーマに同道する。

第 III 卷 森林の巻＝ラーマの留守を狙っ

て、ランカー島の魔王ラーヴァナがスィター妃をさらい島に幽閉する。

第 IV 卷 猿国キシキンダーの巻＝困窮する猿王を援けたラーマは、猿の武将ハヌマーンらの協力を得る。

第 V 卷 美しい巻＝ハヌマーンはランカー島に忍びこみ、幽閉されているスィター妃に救出にくると知らせる。

第 VI 卷 戦闘の巻＝ラーマはハヌマーンらの協力で、ラーヴァナを倒してスィター妃を救出するが、妃の貞節に疑問をもつ。そこでスィター妃は火神アグニのなかに身を投じ、無傷であったことから無垢が照明される。

第 VII 卷 大団円の巻＝ラーマはアヨーディヤーに凱旋して王位に就くが、民のあいだにスィター妃の貞節について疑いが強くなったため、彼女を森に捨てる。森で二人の王子が生まれ、のちに王と妃と王子が会うが、そのとき地中から女神が現れて妃を腕に抱きとめて地中に没する。

因みにラーマの語源は「魅力的な、美しい」であり、スィターの語源は「畝、溝」である。

【III】『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖）』：諸々の『ラーマーヤナ』とトゥルスィーダースによる 16 世紀のヒンディー語翻案（超時間の例）

トゥルスィーダースによる『ラーム・チャリト・マーナス（ラーマの行いの湖）』は、構成と物語の大筋で古代インドの叙事詩『ラーマーヤナ』と同じだが、細部で古代のものと異なる。

トゥルスィーダースは『ラーム・チャリト・マーナス』を編むにあたって、3 世紀ころ現形になった古代インドの叙事詩『ラーマーヤナ』、15 世紀から 16 世紀にヴェーダーンタ哲学の立場からサンスクリット語で編まれたラーマの物語『アディヤートマ・ラーマーヤナ』を参照し、かれの時代の人々の願いを参酌した。

トゥルスィーダースの『ラーム・チャリト・マーナス』はのちに、野外劇ラーム・リーラーとして演じられるようになり今日にいたる。またインド国営 TV ドラマ『ラ

『ラーマヤナ』は、1987年1月から1988年7月までの日曜の朝40分番組として78回にわたって放送された。

五つのラーマ物語の異同を、スィーター妃拉致の場面、救出後の貞節への疑問、結末について以下に対照する。

	古代インドの『ラーマヤナ』	『アディヤートマ・ラーマヤナ』	『ラーマの行いの湖』	『ラーム・リーラー』	TV版『ラーマヤナ』
妃拉致の場面	妃の頭と髪を掴み車に乗せる	妃の足許の地面ごと手に乗せる	妃の幻影を妃と思い車に	妃の幻影を妃と思い車に	妃の幻影を脅し攫う*
貞節への疑問	火神アグニが潔白を証明	火神が潔白を証明し妃をラーマに	幻影が消えて妃が戻る	火神が妃は潔白だと証す	火神から妃が戻る
結末	妃は地中に呑まる、ラーマ天界に	妃は森に去る、ラーマ天界に	妃はラーマに仕え幸せに	妃は地中に、ラーマは天界に	ダシラ王健在、みな幸せに

* 妃の救出後に「幻影」と説明

(註) この数年にあいだに、『ラーマヤナ』のCDやDVDも多数市販されている。

出典

Bajjnath, Rai Bahadur Lala(tr.) *The Adhyatma Ramayana*, Allahabad: Panini Office, 1913 (Reprint by Munshiram Manoharlal in Poddar, Hanumanaprasad (ed).*sriramacaritamansa (satika)* 12th ed., gorakhpura: gita presa, 1961.

Raamanarayana sastri (ed. & Hindi tr.). *maharsi valmikipranita srimadvalmikiya ramayana*, gorakhpura: gita presa, 1960.

Sagar, Ramanand, 脚本のTVドラマ『ラーマヤナ』=Transcribed by Girish Bakshi and edited by Tomio Mizokami, *Ramayana, A TV Serial by Ramanand SAGAR*, published by Osaka University of Foreign Studies in Two Volumes in 1992.

Tribedi, Sudarshanlal.*Raamlilaa Darpan Naatak*, Vaaraanasii: Thakurprasaad and Sons, n.d.

[IV] 『ラーマヤナ』で妃をラーヴァナが拉致する場面と物語りの結末場面の訳(坂田の試訳)

この叙事詩で継承と創造を示す場面を選んで邦訳で示し、文学史叙述のしかたを考えたい。

A. スィーター妃をラーヴァナが拉致する場面

(1) 古代インドの叙事詩『ラーマヤナ』から

「人間ラーマへの執着を捨て、われラーヴァナをこそ愛すべし」

かく喚きつつラーヴァナは、左手でスィーター妃の髪を掴み、

右手を両足の下に添え、カズクで車に載せたり。(III 49-13~20)

(2) トウルスィーダースは『ラーム・チャリト・マーナス』から
苦行者の身なりで妃に近づき、ラーヴァナ愛の甘言を弄す。
本性見破られ怒りしラーヴァナ、妃をば車に載せ攫う。(III 28・4~8)

(3) 『ラーム・リーラー』から () 内はト書
(行者の惨めな姿でラーヴァナ登場)

ラーヴァナ 「空腹に苛まれて嘆く、われを援くる者おらぬ。だれもかれもが痛みを知らず、われを援くる者おらぬ」

スィーター 「だれが嘆き悲しむ声が聞こえます。困っている人なのでしょう」

唄：こちらへおいでなさい、苦行者さま。ありあわせの食べ物ですがおあがりください。

(行者姿のラーヴァナはスィーターに近づくが、妃を護る見えない火に囲まれ倒れる。)

スィーター 「すぐに助けに参ります」と言いつスィーター、水壺と食べ物を持ち見えない火の外に。

ラーヴァナ 「おお妃よ、わしはランカーの王ラーヴァナじゃ」と本性を顕す。

本性見破られ怒りしラーヴァナ、妃をば車に載せ攫う。(III の第二幕「道」の場)

B. 叙事詩の結末場面

(1) 古代インドの叙事詩『ラーマーヤナ』から

わらわが背の君ラーマさまのみを敬愛している証しに、
地の女神さまよ、われを腕に抱きたまえ。

スィーター妃のこの言葉を聞いて地の女神、
妃を抱きうけ地中より現れし台座に迎う。

王座に就きしラーマ王、平和な国を長く治む。

しかるに暝界よりラーマを迎える使者きたる。

迎えを受けてラーマ王、クシャとラワの二王子を王座に。(VII-97-13~107-21)

(2) トウルスィーダースの『ラーム・チャリト・マーナス』から
背の君の幸いを一心に、妃のスィーター日夜お側に。
スィーター妃は生みたまう、麗しきお子をラワとクシャを。(VII-24-2~25-3)

(3) 『ラーム・リーラー』から () 内はト書、[]内は坂田の補足説明。

[スィーターは民のなかに彼女の潔白を疑う者がいると察して]

背の君よ、わたしはなぜか森に住んで、聖賢のお側で暮らしたくなりました。

答えてラームが言う、「望みを叶えよう」

(森に行ったスィーターは、火に包まれて自らの命を絶とうとする。そこへヴァールミーキ仙が現れ、こう言う)

「あなたはラーマの御子を懐胎しておられる。わしの庵にこられるがよい」

[スィーターはラワとクシャを産んで育てる。]

[勇猛を振るったラワとクシャは、ヴァールミーキ仙の導きで父のラーマ王に遭い、王に抱かれる]

(そこへラーマの命でラクシュマナがスィーターを迎えにくるが、-スィーターはこう拒む)

「もうわたしには都にも森にも用がありません。地の女神のお慈悲でわたしを包みこんでいただきたい」

(こう言いおわったときに地が裂け、地の女神が顕れてこう言う) 「わたしのところにおいでなさい、あなたを疑うラーマのところに行くことはありません」

[ある日、ラーマのところに行者が来てこう言う]

「ラーマよ、わたしは行者の姿をしているが、暝界からの使者ヤマジャ」

ラーマは暝界への迎えを受けいれ、姿を消す(天界に行く)。天から降るように花が落ちてくる。(VIII-第一幕「ラーマの館」~第三幕「扉」)

[V] ほかの言語による文学で、ラーマの物語り、クリシュナ神話・伝説、季節巡り「バーラハ・マーサー」は?